

みどりの ニュースレター

3
2010
No.202

市民の発信で持続可能な社会をつくる

特集：琵琶湖とつながる里山 ——人の暮らしと生き物 生物多様性を考える



琵琶湖の豊かな自然



ヨシ刈りの風景



琵琶湖の水と共に暮らす

特定非営利活動法人

環境市民

¥200

収益の一部は環境市民の活動資金として使わせていただきます。なお、会員には毎月無料配布しています。

このニュースレターはボランティアの手で折られ発送しています。



21世紀 地球を、地域を、生活を、持続可能な豊かさに

<http://www.kankyoshimin.org/>

1月30日(土)に滋賀県草津市下物町のヨシ原おるしもでヨシ刈りを体験しました。
詳しくは、特集をご覧ください。

みどりの ニュースレター

No.202 2010年3月号

編集員が行く！

編集部のアンテナにかかった選りすぐりの
エコ情報を伝えます！

No.9 地元の野菜と農家に出会える場所 マルシェ・ジャポン

編集員が行く！ 02

地元の野菜と農家に出会える場所
マルシェ・ジャポン

特集：琵琶湖とつながる里山—— 人の暮らしと生き物 生物多様性を考える 03-08

行事案内 09

とれたて！ 環境市民 10-11

あなたにとって「生物多様性」とは？
環境 NGO・NPO 地域ワークショップを開講

環境市民 東海事務所だより 11

生物多様性条約第10回締約国会議 ニュース
レター翻訳者募集

青き星 碧い風 12

第28回 冬のフライブルクから日本を考える

地球のなかま 13

第39回 ヨシで暮らす—カヤネズミとヨシキリ

読者交流コーナー みどりのかわらばん 14

1/ 環境市民 15

多くの人、特に下流域にあたる京都・大阪の人に琵琶湖のことを知ってほしいです/
宮永 健太郎さん

「マルシェ・ジャポン」を知っていますか？ 全国の主要都市で開催されている、都市住民参加型の市場（マルシェ）です。生産者と生活者が繋がり、農と食の知識を広げながら、交流や体験を通して豊かになることをコンセプトに行われています。



ある日曜日の夕方、神奈川県川崎市のラ・チッタデッラ川崎という商業施設の一角の広場で開かれているマルシェに行ってきました。この日は、神奈川・茨城・埼玉などから15店ほどの農家やお店が野菜、果物、パン、ケーキ、ジャム、ジュースを出していました。マルシェの開催を知ってやってきた主婦もいれば、通りすがりに立ち寄って来たような家族の姿も。「茨城は、寒いから根菜類がうまいよ。こんやくと一緒に煮たらいいよ」と、威勢のいい茨城弁の農家のおじさんは、にんじんとごぼうを新聞紙に包んでくれ、さらにチンゲンサイもつけてくれました。次に目に留まったのは埼玉の名産、太くて香り高い深谷ねぎ。「アルミホイルで包んでグリルで真っ黒にこげるまで焼いたらいいよ」とのこと。そして今回のお目当て、神奈川県三浦産の「三浦大根」を発見！ 葉っぱも入れると80センチはありそうな、ずっしり、つやつやの大根を購入しました。

作り手から直接買える安心感と、地産地消ならではの低価格。農家の人たちとの会話を通して得られる、食材の料理方法や食文化、地元の風土や名産情報。マルシェの掲げるコンセプトが、スーパーでは味わえない魅力となり、楽しい気分です。つい買いすぎてしまいます。この日は朝採りの無農薬野菜に後ろ髪をひかれつつ、帰路につきました。

「農家やその親族が、収穫の合間に出店しています。たくさんの人に來てもらえれば定期的に開催できますし、それが農家を応援することにもなります。また、国産のおいしさを知って、家で料理をすることの楽しさを感じてもらいたい」と話すのは、マルシェ・ジャポン全国事務局の三宅さん。開催場所によっては食や農を知る様々なイベントが催されているそう。スケジュールをチェックして、ぜひ近くのマルシェに立ち寄ってみてください。あぁ一味がこっくり染み込んだ、ぶり大根。おいしかったー！ マルシェ・ジャポン公式ホームページ <http://www.marche-japon.org/>

(文・写真/ニュースレター編集部 駒 ゆき香)

次号
予告

みどりの
ニュースレター

No.203
2010年4月号

現在
編集中!

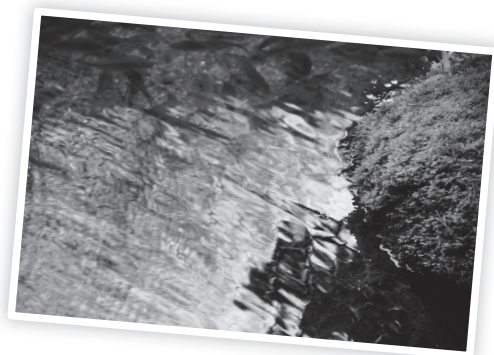
特集：環境クイズ（仮）

環境市民が実施しているプロジェクトから環境に関するクイズが勢ぞろい。お楽しみに。

特集：琵琶湖とつながる里山—— 人の暮らしと生き物 生物多様性を考える

琵琶湖の周りには多くの方が暮らしています。琵琶湖は人の暮らしとともに、その影響を受けざるをえませんでした。同様に、人と琵琶湖とのかかわりが、その生き物たちの生き方をかえてきたとも言えるのではないのでしょうか。

人も生き物のうちの一つ。うまく共にこれからも生き続けていくために、私たちが考えることは何でしょう。そして、これは琵琶湖だけの問題ではなく、地球という星に生きる私たちすべての問題でもあります。



琵琶湖を支えて来た里山

文/国民森林会議会長・名古屋大学名誉教授

ただき よしや
只木 良也

四手井綱英先生、という名をご承知の方も多と思います。昨2009年11月26日ご他界。あと4日で98歳、その直前のことでした。先生は、今や社会的用語となった「里山」の語を使い始め、広めた人として世間に知られています。先生の里山への想いには、若い頃から長年親しんできた琵琶湖を取り巻く里山が、かなり大きく影響していたことは、その著作からもうかがい知れます。

先生は、私の恩師です。農林省から転じて京都大学教授となられた先生の指導の下で卒業論文を書いた第1期生の一人が私でした。恩師を偲びつつ、その「里山」を少々語りしたいと思います。お付き合いください。

里山と琵琶湖

里山と言う言葉は、四手井先生の造語ということになっています。実際には江戸時代にも使用例ありとも言われますが、広く使われ始めたのは昭和40年代後半からで、一般の辞書に採択されたのも平成当初なのです。この「里山」がポピュラーになるのに四手井先生が大いに貢献されたことは、間違いのないところです。

四手井先生の里山概念を一言で言えば、「農用林であって、直接収入を伴わない林」です。すなわち、人里周辺にあって農業・農村の肥料源・エネルギー源として使われるが、直接の金銭収入を伴わないもの、でした。つまり、生葉・落葉や下草は勿論、柴や薪でも、材木でも、自家用利用が「里山」

であって、収穫物を売り物、つまり金銭収入の対象とする林は、裏山の身近な存在であっても、それは里山ではない、と厳しく定義されています。

古くは人里近くの山を、奥山すなわち内山に対するその外側の山で「外山」、奥山へ入ってゆく戸口の山で「戸山」、奥山から人里へと続いてきた端の山の意味で「端山」などと呼んでいました。小倉百人一首「高砂の尾上の桜咲きにけり 外山の霞立たずもあらなむ」の、「外山」がそれです。

現在、「里山」は社会的な慣用語となりました。しかし、農業用利用がほとんどなくなった今、人里や集落を広く解釈して、農山村、都市近郊を問わず、人間生活の周辺近在にあり、昔から人々が使ってきた林（すなわち原生林ではない）、と広義に解釈するのが現実的だと私は考えています。ただし、その中心的存在は、農村-農用林-低山地域であることはいまでもありません。

さて、琵琶湖に蓄えられ、流し出される水は、ほとんど全部、近江の国に降った雨や雪です。それが、京都・大阪をはじめ、下流1400万人の生活を支えて来ました。そしてこれからもそうなのです。近江の国・滋賀県は伊吹山1377mが最高峰で、亜高山帯はありません。それに湖畔には広い平地が広がって、人が沢山住みついてきました。平地部から標高約400mまではシイ・カシ類の暖温帯照葉樹林、標高400~700mはコナラなどの中間温帯落葉樹林、そして、標高700m以上は、ブナやミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林。つまり、滋賀県の森林の大半は「里山」とも言えるわけで

す。とすれば、里山が琵琶湖を育て、維持してきたとも解釈できます。

草津市にある滋賀県立琵琶湖博物館、その名からも湖主題の博物館であることは言うまでもないのですが、里山の展示・説明にもかなり力を入れているのも、もっともなことなのです。なお、1996年の博物館開館記念シンポジウムも、湖テーマと、1週間おいての里山テーマのもの二本立てでした。

森林と水との関係は、昨年3月の本誌190号に書かせていただきましたので、ここでは省略しますが、琵琶湖周辺の里山の歴史で特筆すべきは、燃料用木材利用でした。昔から住む人も多く、また消費の多い都に近いこともあり、琵琶湖周辺里山の薪採取は、かなり強度に進んだようです。明治期前半まで湖東では、御神体（磐座）である三上山を除いてはげ山状態であったといわれ、薪採りの権利を巡る集落間のトラブルも多発したようです。

里山、田と土と山

上述の四手井先生、昨年9月に『これからの日本の森林づくり』（ナカニシヤ出版）を上梓され、それが絶筆となりました。この本には、私たち弟子数名が先生の論を補強する筆を加えさせていただいています。先生の里山論に付け加え、私は以下のような勝手な解釈を記しています。

「里」と言う文字を分解すれば、「田」と「土」。「田」は農地、「土」はその生産力を象徴、「山」は森林を表現していると言えますから、この里山の文字を、「里山とは農地の生産力を支えた森林」とこじつけても、大きな抵抗は無かろうと思います。

わが国の農業の代表は水田米作です。水田は斜面

を登るのは不得手ですから、そのおかげで、山の斜面には森林が残りました。降水量の多いわが国の基本的植生は森林で、斜面を持つ「山」はイコール「森林」でした。もちろん、景観的には素晴らしい棚田もありますが、それは技術的・労力的に大きな負担を伴う例外的存在です。

斜面に残された森林は、水田に必要な水の供給源、そして、森林の生葉・落葉や下草は水田農地の有機肥料、森林からの柴や薪を燃やした後に残る木灰は無機肥料として有効でした。「里山」の成立です。それは水田農業が森林を残し、森林が農業を維持する共生的関係とも言えましょう。「お爺さんは山へ柴刈りに」、「お婆さんは川へ洗濯に」、「枯れ木に花を咲かせましょう」……、里山と農業・農村を表す格好のフレーズです。

これに対して西欧の農業の主流は小麦畑と牧畜で、これらは、斜面を登るのは比較的容易です。歴史の長い西欧では、斜面の森林の農地・草地化も広範囲に進行しました。その結果として、斜面の水土保持能力は低下し、洪水や崩壊が頻発、その反省から西欧諸国に生まれたのが自然保護思想で、それは今から250年も前のことでした。

昭和40年代、高度経済成長に突っ走ってきたわが国が、ふと気が付いて周囲を見渡せば、環境汚染と自然破壊。世論は自然保護に急展開しました。その頃に「西欧では既に200年も前に自然保護思想が生まれている」と、わが国の後進性を蔑む言い方もありました。しかしそれは、わが国の里山で象徴されるような、農業という産業と自然との共生的な関係、そして西欧よりもずっと降水量が多くて夏暑いという、森林成立により適したわが国の気候環境を考えない言い方だったと思うのです。

里山と琵琶湖と暮らす——滋賀県高島市

文/ニュースレター編集部 千葉 有紀子

『昆虫記』（福音館書店）という本があります。著者である写真家の今森光彦さんにお伺いすると、1700枚も収められたそのほとんどの写真が滋賀県の中で撮ったものだというのです。滋賀県以外で撮った写真は本当に数枚、この地域にこれだけの昆虫がいるということは驚きです。

虫に限らず、生き物の種類が多いということは、いろんな環境があり、その環境を生き物が上手に利用しているということです。その生き物の中には、人間も含まれています。環境も生き物も多様性に富んでいるほうが、暮らしやすいのは間違いがないでしょう。

滋賀県と一口に言っても、環境は大きく異なります。今回取り上げる高島市は、福井県、京都府、大津市に囲まれ、その中に中山間地と琵琶湖を含み、冬は豪雪にみまわれることもしばしば。その中にはスキー場もあり、現在も稼働中。裏日本気候地域に分類され、「弁当忘れても傘忘れるな」というほど雨が降り、降水量の多くは冬の雪で、その雪が一举に溶けることなく徐々に溶けることにより、琵琶湖に注ぐ水量を自然に調節しています。不思議なことに他の地域では6月に多い降水量が高島市では少ないそうです。

そんな高島市に東京から移り住んだのは、今森光彦さんの弟である洋輔さん。東京に住んでいた頃はイラストレーターとして活躍されていましたが、現在は細密画家としての活動が中心です。兄弟で管理する雑木林のすぐ側に、家を構えました。移り住んでまず思ったことは「動物との距離の近さ」だといいます。近くにいつも生き物のいる気配がある、そんな暮らしです。お二人は大津市の出身で、農家でなく普通のサラリーマンの家庭で育ちました。二人ともいろんな土地を巡った後、滋賀県に帰ってきて、そこをフィールドとして選びました。今森さん兄弟が管理する里山にもいろんな動物が訪れてきます。そんな滋賀県の魅力は、生物の多さにあり、その生物たちとの近さにあるといいます。

動物たちには、国境も県境もありません。自分たちの居心地のいいように移動し、利用しています。

たとえば、田んぼというのは、人間が稲作のために水を溜める場所ですが、生き物もその場所を大いに利用しています。川や琵琶湖から、上ってきたり下ってきた魚の稚魚たちや、逆にそれを捕食するものたちが集まってきます。アキアカネは自分の命が尽きる前に、水が完全に干上がっている田んぼに卵を産みます。卵はその状態で冬を越し、やがて春の訪れとともに、水の入った田んぼでヤゴになります。そうやって作られてきた環境は長い間に培われた人間と生き物との信頼関係と言えるのではないのでしょうか。

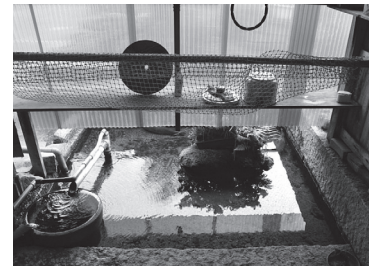
里山環境もそうです。奥山につづく里山は、人間が常に手を入れているので、明るく清潔感があります。その場所を餌場として利用するものも、住むものも、時々訪れてくるものもいます。最近手を入れる人が少なくなって荒れてきた里山はだんだんうっそうと木が生い茂り、奥山との境目がなくなってきました。里のあたりまで下りてきて欲しくないと人間が思う、イノシシやシカやクマなどの生き物たちが、逆にだんだん生活圏を人間に近づけつ

あるのが今の山の現状。もちろん滋賀県もその例に漏れません。

話を高島市にもどしましょう。いろんな環境をうまく使いこなすのは、人間も同じです。滋賀県の中でも特に自然環境が多様な、里山や棚田が多く残る高島市は、人間と生き物が共に暮らす環境が多く残ります。

里山と水田と湖があるという環境は、人の生活も多様性があります。たとえば、高島市新旭町針江地区、田んぼもあり、湖も近く、内湖も美しく残っています。琵琶湖の固有種のニゴロブナをはじめ、いろんな魚の産卵場所となっているヨシ原、その内湖に注ぐ水は冬の降った雪が少しずつ土に染み込み、すこしずつわきでてきます。ミネラルを多く含む水は生き物を育むのに最適です。

湖に注ぐ川の水は、家々をつなぐ「かばた」ともつながっています。その中ではコイも飼えば、スイカも冷やし、野菜の泥も落とし、鍋も洗います。鍋の汚れはコイのごはんになります。その中にヨシノボリなどの魚も生活しています。



針江地区の「かばた」

この地区で魚を営む方も多くは兼業農家。冬場はアユ漁に精を出します。家族単位の小規模の漁師の方が多く、農業の合間に漁に出ます。家には農機具と漁の道具の両方おいてあり、採ってきたアユを網からはずすときには、家族総出です。

暮らす人は、自分たちが汚したらそれが琵琶湖につながることでよくわかっていますので、昔から、環境に対する意識は高く、それが今の環境を保ってきたのでしょう。今もたとえば、冬場も田んぼの水を抜かないなどの工夫や、できるだけ農薬を使わない農業など、試行錯誤は続いています。

いろんなことがどうつながり、後々どんな影響を及ぼすのか、それはずっといろんな工夫の積み重ねで今の琵琶湖があります。そんな琵琶湖と里山の暮らしには、いろんな生き物との出会いと、ちゃんと地に足をつけた人間の生活がうまく融合しています。だんだん生き物たちの生息域を狭めていっている私たち人間、同時に環境も破壊していっている現実を否めません。それでも、共に暮らすヒントは、琵琶湖と共に暮らしてきたことと、これからも暮らす中に見えてくるのではないのでしょうか。

ヨシ原と人がうみだす生物多様性

森で生まれた水は琵琶湖へ流れ、ヨシを育み、1000種を超える動植物を潤します。水の恵みを受け、里の雑木林のように人と共生する水辺のヨシ原。最近では生物多様性を生み出すゆりかごととして注目されています。



ヨシでつくったミミズク〜ヨシ刈りの合間に〜

ヨシは、北海道から沖縄まで日本各地の湖沼や河川、汽水域に生育するイネ科の植物です。琵琶湖では内湖や瀬田川を含む湖岸域に多く見られ、野鳥観察の場として親しまれています。ヨシは軽くて丈夫な材として、古くから葦簾や屋根などに利用されてきました。特に屋根材として最適で、茅葺屋根の中で最も耐久性が高いと言われています。また、琵琶湖特有の漁具であるエリ（湖岸や湖中に簾を張り、これに誘導された魚を獲る定置網）や生薬としても利用され、琵琶湖周辺の生活に根づいていました。ヨシは農閑散期に刈り取られ、農家の副業として人々の生活を支える一方、その新芽は枯茎が除去されることで成長する場を確保していました。このようにヨシは古くから人と共生関係を築いていました。同時に、ヨシの群生するヨシ原は多くの生物にも利用されています。

ヨシは生物たちのゆりかご… ヨシ原を利用する生物たちの多様性

ヨシ原は鳥類や陸上昆虫の繁殖場所として利用され、冬にはカモなどの水鳥や小鳥類の越冬場所になります。また、オオジュリンやウグイスなどは、ヨシ原を餌場として利用し、ホオジロやカシラダカは、休息場やねぐら場をしているようです。実は、ツバメもヨシ原を利用します。ツバメは子育てが終わってから秋の渡りの前まで、夜は集団で過ごし、ヨシ原をねぐらにすることが多いのです。また、ヨシ原はその面積が広いほど鳥の種類が増えることが報告されています。一方、カンムリカイツブリのように営巣に約8ha以上のヨシ原が必要な鳥もあり、ヨシの生育面積は生物の多様性創出には不可欠です。さらにヨシ原には、マコモ、カサスゲ、オギ、ウキヤガラなどの草、ヤナギ、ハンノキなどの樹木も生育しており（これらの植物をまとめてヨシ群落と呼びます）、ヨシ同様多種多様な生物の生活の場となっています。



ヨシは草丈2~4m、8~10月に円錐形で大きな黄~紫褐色の花を咲かせます。秋に穂をつけ、小さな種をつくりますが、野生のもので種から成長するものは稀です。12月を過ぎると地上部の茎や葉は枯れるので、1年草のように見えますが、地下茎が越冬する多年草です。地下茎は夏の終わりから新芽の準備をはじめ、春には地上に出て成長します。

ヨシ原に適応するニゴロブナ

水中では、枯茎が重要な役割を果たしています。枯茎は、魚やエビ、両生類や水生昆虫の産卵場所として、多くの微生物が付着する餌場として、琵琶湖の豊かな生物相を支えています。ふな寿司の材料であり、琵琶湖の固有種であるニゴロブナは、琵琶湖や流入する川や水路に生息し、ヨシ原で産卵をします。稚魚のすむヨシ原の奥地は、陸から流入した有機物や枯草が堆積し、ミジンコなどの微生物が生息しています。有機物の分解が活発で酸素消費が多く、低酸素状態であるため、あまり魚は寄りつきません。しかし、ニゴロブナの稚魚は低酸素状態に強く、えさが豊富で捕食者の少ないヨシ原の奥地は格好の住みかなのです。稚魚にとってヨシ原はまさにゆりかごなのです。近年ニゴロブナの生息数が減少している要因のひとつとして、ヨシ原の減少による産卵地・生息地の減少が考えられています。

ヨシ原の現状、そして保全、共生の道へ

近年ヨシ原は、浅い水辺の埋め立てや河川改修などにより失われ、昭和28年に260haあったヨシ原の面積は平成3年には130haに半減しました。また、日本人の生活様式の変化や安価な中国産のヨシ製品の参入により、ヨシの利用は減り続け、その結果ヨシ原は放置されるようになりました。荒れ放題のヨシ原では植生遷移が進み、ヨシは次第に姿を消していきました。滋賀県ではこの状況を改善しようと、1992年に琵琶湖のヨシ群落の保全に関する条例を施行しました。「ヨシを守る・ヨシを育てる・ヨシを活用する」の三本柱とし、ヨシ群落保全地域の指定やボランティアによるヨシ刈り、ヨシの紙漉き体験を実施しています。県民と共同で行うヨシの保全やその普及活動が徐々に功を奏し、ヨシ原の面積は平成19年度には150haまで回復しました。

ヨシ刈りを体験して…… ヨシを大切にす文化が 人々をつなげる

1月30日（土）の午後、滋賀県草津市下物町おろしものヨシ原にてヨシ刈りを体験しました。隣には駐車場とトイレ付きの道の駅があり、初心者でも気軽にできる場所です。当日は快晴で、地元と他府県から約100人が参加しました。このヨシ刈りは 地元の下物で地域に根ざす活動をするNPOノースウィンドジェネレイトクラブ（NWGC）が主催し、淡海環境保全財団がヨシ群落保全条例・基本計画に基づいて現場で保全活動の推進を後押ししています。昨年からはびわ湖エコアイデア倶楽部（BEIC）も一緒に参加するようになりました。BEICはパナソニックグループの従業員有志が中心となって結成したNPOで、琵琶湖とその流域の生態系維持と水質保全を進めています。このように、地元・行政・NPOが協力してヨシ刈りを行っています。

この試みは、放置されていたヨシ原を昔のように戻そうと10年前から再開されました。その当時は草丈2mほどのふぞろいなヨシ原でしたが、ヨシ刈り続けることで徐々にきれいになっていったとNWGCの畑さんは言います。最近では草丈4mにまで成長しました。ヨシ刈りの意義は、地上茎の抜け殻を取り新芽の出る環境を整えることです。それは、私たちが髪を切ってさっぱりするようなものだと思います。その整った環境が生物たちにも快適なのでしょうか、最近はヨシキリや魚が多くなったそうです。

早速、ヨシ刈りの始まりです。足場はぬかるむので、刈り取った茎の上を歩きます。中腰で刈り続けるのは大変ですが、ヨシはあっさり刈れるので刈る手が止まりません。作業中にカヤネズミやヨシキリの巣が見つかりました（詳細は13ページの地球のなかまをご覧ください）。これらの巣はヨシ原の健康を見るバロメーターです。昨年より多くの巣が見つ

かり、ヨシ原は健全な状態に戻りつつあるようです。ヨシ刈り終了後は火入れをしました。ヨシを休眠から目覚めさせ、害虫や雑草を防ぐためです。焼け跡の灰は肥料になります。乾燥したヨシは音を立てて一気に燃え、遠くからでもその熱さを感じました。春になると、この焼け野原から出る新芽が琵琶湖の生きものをはぐくむのです。作業後は、近くの研究施設でヨシの腐葉土作りを見学しました。今回刈り取ったヨシは田畑の肥料として利用されます。これは琵琶湖の富栄養化の軽減にもなります。また、菊や花の培養土としても適しているそうです。この地域にヨシを大切にす文化があるからこのような試みが出来ると、淡海環境保全財団の田井中さんは言います。

今回のヨシ刈りを通して、地域に脈々と息づく琵琶湖のヨシ文化を体験できました。また、

今後のヨシ原の成長とそこに生育する生物たちの生活も気になるところです。このように「まず、関心を持つこと」が大切であると、BEICの是安さんと歌代さんは言います。その関心が活動の意欲となり、活動したことで地域を好きになる。地域の人とつながり新しい交流が生まれ、そこから新しい活動が生まれるのだと声をそろえます。NWGCによる地域に根づいた活動が周囲の関心呼び、さまざまな交流を通してヨシの地下茎のような頑強なネットワークができたのでしょう。帰りがけに琵琶湖の山々へ沈む夕日を見ながら、来年もヨシ刈りに参加しようと思いを決めました。



【取材協力】 NPOノースウィンドジェネレイトクラブ 事務局長 畑 源さん
財団法人淡海環境保全財団 田井中 文彦さん URL : <http://www.ohmi.or.jp/>
NPO びわ湖エコアイデア倶楽部 URL : <http://blog.canpan.info/biwakoecoidea/>
運営委員長 是安 徳人さん 理事、事務局長 歌代 泰和さん

【参考文献】 西川嘉廣（2002）『ヨシの文化史—水辺から見た近江の暮らし』サンライズ出版（淡海文庫24）
西野麻知子・浜端悦治編（2005）『内湖からのメッセージ—琵琶湖周辺の湿地再生と生物多様性保全—』サンライズ出版

文/写真 ニュースレター編集部 大槻 達郎

琵琶湖から 生物多様性を考える

文/環境共育事務所カラーズ代表・同志社大学大学院総合政策科学研究科准教授 西村 仁志

私は京都で生まれ育ちましたが、大学生時代にボランティアとして、またその後職員としてかかわったYMCAの活動を通じて、近江の地と琵琶湖への結びつきが身近なものとなりました。日野川の河口近く、近江八幡市佐波江の湖畔にYMCA教育キャンプ場があり、大学4年間の夏休みはほぼ全てそこで過ごしていました。京都からサマーキャンプにやってくる子どもたちと生活を共にしながら、水泳、カヌー、カッターなどの指導をします。船で乗り出していくと湖面にピチピチと魚たちが跳ねていたのを思い出します。子どもたちの賑やかな声が出始める前の早朝に、ひとりで浜に出て澄んだ空気を吸い込みながら、目の前に広がる湖面と対岸の比良の山々や、空を見上げるのは大好きでした。そんなシーンは今思い出しても清々しく、頭のなかに鮮明にイメージが広がります。

YMCAに就職してからは草津市の活動拠点に配属となり、京都から通う生活を3年間過ごしました。ここで担当した「こどもたちの自然体験活動」が、「環境教育」というテーマと出会い、いまそれを16年ものあいだ専業の仕事としていく大きなきっかけ、原動力となっています。琵琶湖とそれにつながる川、里山や比良の山々などのフィールドとの出会い、生きものたちとの出会いや、そこでのさまざまな遊びの体験が、子どもたちにとって人と自然への感性や考える力、生きる力を育んでいく、かけがえのないものであることを考えさせられる機会となったのです。

一方でこの時代、1980年代は「琵琶湖総合開発」が大きく進められた時代でもありました。湖岸には道路が造成され、白砂青松の砂浜やヨシ原が消えていってしまいました。子どもたちと一緒に夢中になって魚を手づかみにして遊んだ川は、翌年行ってみると見事にコンクリート三面貼りになっており、河原だったところには緑の芝生がきれいに敷かれていたのです。自然を直接体験することの重要性と

同時に、こうした人間の暮らしの近くにある生きものたちの生息空間が抹殺されていってしまうことへの怒りをなんらかのかたちで社会的に表現していかなければならないと思いました。これもまた環境教育に取り組むことになるもう一つの動機でした。

琵琶湖を育む集水域は湖面そのものの面積の4.7倍にもなります。山に降った水が川となり、また地下水脈となり里や田畑、そして人々の暮らしを潤して琵琶湖に注ぐ。その空間に多様に営まれている生命の循環のストーリーは無数にあるでしょう。そしてかつては人間の暮らしの営みもその循環のなかにあったのです。ところが蛇口をひねれば飲める水が出、家の中に虫が飛べば殺虫剤をまくという暮らしへの変化、そして近くの里山や川で遊んでいた子どもの姿がなくなっていくなかで、私たち人間の「いのち」が無数の「いのち」のストーリーとともにあるという実感が失われてきたのです。「あなたにとって生物多様性はなぜ大切なのですか」いまこの問いに対してみなさんは自分の言葉で語るができるでしょうか。もし明確に答えることができないというならば、まさにこうした実感の欠如によるものです。

南米アマゾンに生きる先住民が、居住地域での天然ガス田の開発を巡ってこう語っていました。「"ガス"とは何ですか？ 私は知りません。私たちの人生は森がつくってくれます。私たちの体は森の動物や魚、そして空気できています。"ガス"がやってきて森がなくなったら、私たちはどうすればいいのでしょうか？ あなたたちがその答えを知っているなら教えてください」と。彼らが持っているのは、まさに身体感覚としての自然との一体感です。

実は琵琶湖もまったく同様です。そしてみなさんにつながるいのちの多様性も。かけがえのない自然の営みが、いつまでも私たちを育みつづけてくれることを願っています。

(西村さんの生物多様性のお話は10Pをお読み下さい)

今回の特集は、大槻 達郎、千葉 有紀子が担当しました。
(写真協力 内藤 一樹)

行事案内 3月

京 環境市民 東 環境市民東海 滋 環境市民滋賀

京 1Day ボランティアデー

毎月エコな話題をおしゃべりしながらニュースレター
発送作業をしています。

*とき：3月30日(火) 午前 11:00 から午後 7:00 頃
まで、3月31日(水) 午後 2:00 から 7:00 頃まで

*ところ：環境市民京都事務局

*備考：予定時間を過ぎて来られる場合は、あらかじめ
ご一報ください。

◎次回発送予定日は……4月27日(火) 午前 11:00 から
午後 7:00 頃まで、4月28日(水) 午後 2:00 から 7:00
頃まで

東 第一回 生物多様性調査

本番を堀川で春に行うための予備調査です。生物多様
性調査の第一回目なのでぜひ参加ください。

*とき：4月4日(日) 午後 1:00 に集合。2 時前から
生き物調査 (2 時間ほどかけて生き物を捕まえながら、
図鑑を片手に調べ、スケッチする)。4:00 前後に解散。

新入会員 インタビュー

わだ ひろあき
和田 浩明さん
(岐阜県) 12月25日入会

オーストラリアの大学で生態学と統計学を学び、今は、
環境に興味を持っている社長の工務店で働いています。
生態系を配慮した庭作りを手掛けても良いということ
で就職しました。春は土手で山菜、夏は川で鮎、秋は
山できのこなど、自分で採った食材を食べることが好
きです。

*ところ：グリーンフェロー (名古屋市北区清水 5 丁
目 10-8) 集合後、近くの小学校のプールで生き物調べ
*講師：エコソリューションズネットワーク (株) 代表
兼環境市民理事 牧村 好貢
*参加費：無料
*持ち物：鉛筆と外でも描きやすい紙・柄の長い網 (あ
れば)
*服装：気候に合った動きやすい服
*申込み：必要、環境市民東海事務所
*締切：3月30日(火)
*備考：申し込み時に柄の長い網を持ってこられるか
どうか教えてください。小学校のプールの生き物が少ない
場合は、黒川の猿投橋の下流で調査します。

行事の申込み・お問い合わせは各事務局まで

- 京 環境市民
TEL.075-211-3521 FAX.075-211-3531
IP電話.050-3581-7492 MAIL.life@kankyoshimin.org
- 東 環境市民東海事務所
TEL・FAX.052-521-0095 IP電話.050-3604-6182
MAIL.tokai@kankyoshimin.org
- 滋 環境市民 滋賀事務所
TEL.077-522-5837 MAIL.cefshiga@kankyoshimin.org

ミーティング* (いずれも京都事務所で行います)

- * 3月8日(月) 午後 2:30 から 4:30 までラジオチーム
* 3月29日(月) 午後 2:30 から 4:30 までラジオチーム

新入会 / 寄付* (1月9日から2月12日まで)

- 〈新入会〉 増田 紀代子
〈寄 付〉 籠橋 隆明 / 吉田 佳代 (五十音順敬称略)

あなたにとって「生物多様性」とは？

1月15日（金）、「ESD×生物多様性」プロジェクト近畿地域ワークショップが京都市内で開催されました（共催：NPO法人ESD-J、環境市民）。ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で、「持続可能な開発のための教育」を意味します。

会場の「さいりん館室町二条」は、大正時代の京町家を改装してつくられた多目的交流スペースで、34人の参加者は和室で腰を下ろして話を聞きました。

コーディネーターは西村 仁志さん（京都共育事務所カラズ代表）。ゲストスピーカーは井上 和彦さん（NPO法人とよなか市民環境会議アジェンダ21副理事長）、塩見 直紀さん（半農半X研究所代表）です。

まず、西村さんからESDと生物多様性をめぐる背景と現状が語られました。



近年、子どもの自然体験が減少するなか、未来にむけた教育活動として生物多様性保全をめざす活動の推進が重視されています。たとえば「川に入って魚を探す」、これは子どもから大人まで、地域の人も専門家もいっしょになって取り組める活動です。共に体験することにより、生物多様性を共感することが大事だといいます。

次に、塩見さんからは「半農半X」という、半自給的な農業とやりたい仕事を両立させる生き方の紹介がありました。塩見さんは、「ESD×生物多様性」を考える上でのキーワードとして「感性」「ことば力」「育てて用いる」などを挙げられました。なかでも、「娘が生まれたら桐を植えて、嫁ぐ時に大きく育った桐をタンスにしてもたせる」という日本の風習を例に挙げて、生物多様性を考えるときに「守る」だけではなく、「育てて用いる」ことも重要ではないか、と述べられたのが印象に残りました。

ここで、西村さんから「みなさんにとって生物多様性とは何ですか？」と質問がありました。参加者は各自で考え、まわりの人と発表し合いました。生態系を飛行機に例え、「ひとつでも部品が欠ければ飛行機が飛べないように、多様な生物がいるからこそ生態系が保たれている」という意見や、「昔はそんな言葉がなくても生物多様性だった。農薬を使うことで田畑の生き物が減った。多様性を保つためには人間も生き物の一員として考えることが大事ではないか」など、さまざまな意見が出ました。

井上さんは、今回のテーマである「ESD×生物多様性」の実例として、「天竺の原っぱであそぼう会」を紹介されました。会を立ち上げたのは、幼い子どもをもつ母親たちです。大阪府豊中市の服部公園（通称：天竺の原っぱ）は、緑豊かな土地でありながら、フェンスで囲まれて人が入れない状況でした。母親たちはここで子どもを遊ばせたいと思い、行政への説得、地域住民の理解と協力を得る活動を自分たちで行いました。その結果、今では月1、2回公園が解放され、地域住民はだれでも自由に使うことができます。子どもが昆虫採集をしていると、近所に住む虫に詳しい大人が名前を教えたりするなど、子どもと大人が自然に学ぶ場所となっています。大事なことは、母親たちが「社会を変えるのは自分たちなのだ」と気付き、実際に行動したことだと思いました。

2時間のワークショップは以上で終了しましたが、最後に西村さんから、「これをきっかけに議論をスタートしたい」とメッセージがありました。ここで得た視点や考え方、取り組みのヒントをどう次につなげていくのかは、参加者一人ひとりに与えられた課題であると感じました。



（文／ニュースレター編集部 林 映里）

環境 NGO・NPO 地域ワークショップ 環境教育 新たなステージへ～実践、行動につなぐ～を開講

1月23日、24日に、2009年度近畿ブロック「環境 NGO・NPO地域ワークショップ」を開講しました。この講座は独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金が主催し、環境市民が企画、運営を受託したものです。

全体コーディネーターは環境共育事務所カラズ代表で本会理事の西村仁志さんと秋本育生本会代表。

■1日目～自らを振り返り、他へひろがりつながる

はじめに西村さんから「このワークショップをこれから新しく活動をしていくための仲間づくりの場に、活動の実現につなげる」というねらいと、日本の環境教育の問題点（環境教育をすすめるうえでの戦略、連携が十分ではないことなど）について説明がありました。その後、自分が持っているつながりや能力を見直す「私の棚卸しワーク」を行いました。

午後は、子ども向け、大人向け、そして事業者、行政との協働による環境教育について、講師から先進事例の紹介を受けた後、二日目につなげるワークとして、各自のこれから取り組みたいことを考え発表しました。自分の考えと他の人の考えを結びつけ、新しいアイデアを発見するきっかけをつくることができました。

■2日目～他者の意見に耳を傾け、自らの思いを伝え深める

2日目は「地球温暖化防止」「地域コミュニティ」など五つの班に分かれて議論しました。さまざまな考えの人が話し合うことで、ひとりでは思いつかないような意見が出たり、話が思わぬ方向に進んだり、2時間半があつという間に過ぎてしまいました。最後に1週間後、1か月後、1年後にすることを参加者の前で発表して全日程終了。

二日間を通して、自分のやりたいことは何か考えを深め、さまざまな人の考えに触れたことで、次の活動を考え出す機会、そしてともに活動していく仲間やネットワークづくりの場になりました。



グループディスカッションの様子

(文/立命館大学3回生 相山 明里)



環境市民 東海事務所だより

“ 生物多様性条約第 10 回締約国会議 ” ニュースレター翻訳者募集

生物多様性条約第10回締約国会議に関連し、「NPO生物多様性フォーラム」より会議開催中に発行される「ECO」というニュースレター翻訳の依頼がきています。

そこで、環境市民の会員でできるようであれば手を上げたいと思っています。会員でなくても確実に責任を持てる人であればいいと思います。希望者は東海事務所まで連絡ください。（ニュースレター裏面参照）

「ECO」とは、生物多様性条約の会議開催時、CBDアライアンスという国際NGOネットワークが発行するフリーのニュースレターです。COPなど重

要な会議の開催時に発行されます。特にCOPの開催時には毎日発行されます。その内容は、前日の会議内容とコメント、NGOの声明（時として抗議の声明）、その日の会議やサイドイベントなどの案内が中心です。

海外では英語、仏、西のみなので、できるだけリアルタイムで、ECOの日本語版を発行しようというのが、ECO日本語化プロジェクトです。「ECO」は通常4ページなので、一人が1ページを短時間で訳せば、翌朝、英語版のECOと同時に発行することができます。そして、日本人にCOP10に関するNGO情報をリアルタイムで届けることができます。ご応募お待ちしております。

グ

グリーン購入をすすめる人材の養成制度の調査のため、久しぶりにフライブルクを訪れた。ドイツの環境首都に選ばれたまちの中でも、日本では最も有名な都市である。ドイツ鉄道のフライブルク駅の上を路面電車専用の跨線橋が横断している。ドイツの鉄道には改札がないので、フライブルク駅に着いた人は、ホームから直接この跨線橋に上がり市内各地へ向かう路面電車に乗り換えることができる。

市内中心部は、日本でも有名なトランジットモール地域。一般車は24時間立ち入り禁止になっていて、人で賑わっている。ただ、訪れた日は最高気温でマイナス1℃。これではいくらなんでも、あまり多くの人がまち中を歩いていることはないだろうと、考えていた。しかしこの予想は、見事に外れた。平日の昼間、人々寒さなど気にせず、まち中を行き交っている。

仕事でという人もいるだろう。しかしかなりの人がショッピング、散策、レストランやカフェを楽しんでいることが分かる。日本では大都市を除いてこんなにぎやかな風景は見られない。いやこの気温なら、通勤や仕事以外の人がこんなにまち中を歩いているなんて大都市でもあまり見られないだろう。

なぜだろう。ドイツの人は、日本人よりは、歩くのが好きなのだろうか。それもあるかもしれない。しかし、もっと大きな理由があるように思える。それは、まちの将来像とそれを具体化する戦略的

な政策、取り組みである。フライブルクは、1980年代よりエコロジカルな都市をまちの将来像として描き、具体化を図ってきた。そのひとつが公共交通と自転車を活用した交通戦略だ。路面電車やバス路線とダイヤの充実。地域定期券や24時間グループチケットに代表される安価で便利に利用できる料金制度。自転車を安全便利に使える専用レーン、専用道、優先信号などの設置。駐車を郊外の駅やバス停付近には無料または安価で多く設け、中心部に近づくに従って高く少なくなる仕組み、そして中心部の自動車乗り入れ禁止地域の設置などなど。

その結果、まちの中心は人でにぎやかとなり、商業が繁盛し、交通事故が減り、環境も良くなった。そんなまちだからこそ、人々はまち中を歩くことを楽しむようになり、例え寒くてもあまり気にしない、のではなからうか。

このように将来像を描いて戦略的に政策、活動を組み合わせて実施し、その効果を評価していく仕組みを「バック・キャスティング」と呼ぶ。バック・キャスティングでは、必ずしも現在の社会経済システムを前提とせず、将来のあるべき社会の姿を、その社会における社会経済システムとともに描くことから始まる。そのあるべき社会を現実のものとするために、今及びこれから行うべきことを戦略的に組み立て、実行に移していく。スウェーデンでは国政もこのバック・キャスティングを中心に行われている。

スウェーデンは、2002年に「持続

可能な発展のためのスウェーデン国家戦略」を策定し、2003年には憲法を修正して、持続可能な発展の概念を採用入れた。様々な国際機関やNGOがおこなった持続可能性の調査でも、常にトップクラスにランキングされている。その社会政策立案の基本になっているシステムがバック・キャスティングである。

スウェーデンは1990年代後半に、将来像・戦略として「2021年のスウェーデン」を策定している。その責任者であるアニタ・リンネルさんは、将来像を描くとき25年後の世界を考えた、と言われた。その理由は「1世代後」といって、そして現実には「1世代後」といって、姿を考えられるからである、とされた。このような思考方法により、政策を戦略的に組み立てている国や自治体が世界にはいくつもあ

対して、日本では、現在の社会経済システムを前提として、その延長線上に取り組みを考え、実行していくことが大半である。これを「フォア・キャスティング」と呼ぶ。

「グ」という。この方法では、対症療法的な施策展開になりやすい。社会が変化をあまり求められない時期なら官僚を中心としたフォア・キャスティングでも何とかやっていけるかもしれない。しかし、現在のようによく社会を変えていかなければならない時代には全く向いていない。

たとえば、日本では当たり前のように地球温暖化「対策」という。しかし地球温暖化の根本的な原因は、私たちの経済システムや文明のあり方の問題であり、対策などではどうしようもないのは明白である。

日本政府や各地の自治体は、バック・キャスティングに転換するためには、NGOももつと働きかけを強めていく必要がある。

※参考 小澤徳太郎(2006)『スウェーデンに学ぶ「持続可能な社会」』朝日新聞社、環境首都コンテスト全国ネットワーク、財団法人ハイライフ研究所 編著(2009)『地域から日本を変える7つの提案』学芸出版社

第二十八回 冬のフライブルクから日本を考える

文／環境市民代表理事 校本育生

連載

青き星 碧い風

この連載の奇数回では、世界や日本の豊かな自然を描き、偶数回では日本社会やNGOへの提案を載せていく予定です。

地球のなかま

生き物には、そこで暮らす理由があるものです。
ヨシの中で感じる居心地のよさ、
それはどのようなものなのでしょうか。

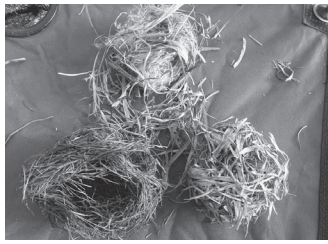
第39回 琵琶湖特集1回目 ヨシで暮らす——カヤネズミとヨシキリ

文／ニューズレター編集部 千葉 有紀子

●カヤネズミとヨシキリの巣

1月の末、きつちりと防寒対策をしてヨシ刈りに向かいました。だいたい1メートルおきに並んで、横並びで刈っていき、手前から順々に刈っていき、これくらいの中に入ってしまったら、ヨシ原の外からは見えない、そろそろ隠れやすそうと思つた頃、目の前に丸い巣が見えました。私の身長は147センチ、目の高さのところ、横にちゃんと小さな出入り口がついているのが見えます。「巣が、巣があります！」と思わず叫んでしまいました。

隣で刈っていた方が「カヤネズミの巣ですわね」と教えてくれました。「今の時期ならもう中にはいないから大丈夫」と言われるので、とにかく潰されない場所によっておいて、ヨシ刈りを続けました。そのあと、30分もしないうちに、隣の方と共同であと2つ、計3つの巣がみつかりました(写真参照)。



ヨシ刈りは進行しています。潰れたり、燃やしたりしたら大変なので、巣は目立つ場所に置いておきました。すると、みんな口々に「何の巣ですか？」と聞いていかれます。

●自然度の指標生物

「自然度が上がっているのかもしれんな」と、3つの巣を見てつぶやかれた方がおられました。生き物にとつていかに暮らしやすい場所であるかどうかを判断する指標となる動植物があります。ヨシ原においては、

カヤネズミなどを指標とすることがあります。その方によると、子ども達にヨシ刈りの前に「カヤネズミの巣をみつけない」という企画をしたこともあるそうです。

ヨシ刈りの日は午前中に別のグループが刈り、午後5、6人が刈っていたのでしょいか。「あー、上なんか全然見てへんわ」と言う方が大半。ヨシ刈りは根元近くを手前にざっくり鎌を引きます。探すつもりではないのと、みつからないのではないかと、たぶんもつとあつたのではないかと、私は思っています。なにせ、2人で30分で3つなのですから。

●カヤネズミとは

カヤネズミは、わずか体重7〜8グラム、身長7〜8センチ。背中はオレンジ色で、お腹は白色。日本で一番小さなネズミです。身長と同じ位の長さの尾があり、器用にヨシなどに巻きつけてよじ登ります。そうやって餌をとったり、巣作りの材料をそろえたりします。食べているのは、エノコログサなどの雑穀の種子や、イナゴやバッタなどの昆虫。家に住むネズミとは別の種類です。

休耕田や湿地などに暮らし、ススキ、オギ、ヨシなどのイネ科の葉や穂などを使って、直径7〜8センチ位の丸い巣を作ります。あまりに簡単な巣なので、笑ってしまいました。中は穂でやわらかく、外は葉っぱでカモフラージュ。なかなか居心地がよさそうです。高さは5センチくらいでした。ダニもついていたようで、私が手にとつたとき、小さなダニがこぼれ落ちました。ちよつと触つただけなのに、巣はだんだん外側の葉っぱが剥がれ落ち、穂だけのふわふわのものになりました。カヤネズミが暮らす開発などによって、カヤネズミが暮らす

のに適した環境はだんだん失われつつあります。残っていた湿地もごみが多くなつて、へどろのような塊になったりすると、居心地が悪くなるようです。人間が適度に手を入れて掃除をし、住み心地がよくなったヨシ原は快適なんですね。

●ヨシキリとは

巣は3つありましたが、一つだけちよつと違います。少し大きく直径11センチ、高さ13センチ、ちゃんと編んであり、素材も枝草です。「ヨシキリの巣ですわね」と地元の方が言います。なるほど、ヨシキリとはコヨシキリかオオヨシキリのことかと思われま。

ヨシキリの名の由来は、ヨシを切つて中の虫を食べるためといわれています。大きく言えばスズメの仲間、近い種類にウグイスがいます。外見はウグイスとよく似ていますが、鳴き声が全然違います。

主にヨシ原のような湿つたところに住むのはオオヨシキリです。鳴き声は、ギョギョギョシーという悲鳴のような声、しばしば一夫多妻となります。夏に繁殖のため、中華人民共和国、日本、朝鮮半島などに渡ってきて、冬には越冬のため東南アジアに行つてしまいます。

そういえばおもしろいことを聞きました。カヤネズミの巣をちよつと拝借することもあるそうです。オオヨシキリはカッコウに托卵されることもありますから、生き物の世界は持ちつ持たれつなんですわね。思つた以上に多くの生き物がヨシ原のお世話になつているのかもしれない。

協力・琵琶湖博物館
今回は予定を変更しました。「アキアカネ」は次回に掲載します。



(((インフォ@エコ

✦ 環境に関するオススメの本、映画、音楽などをご紹介します。

社会技術研究開発 「地域に根差した脱温暖化・環境共生社会」

鳩山首相が国連総会で「2020年までに25%削減します」と演説してからはや5か月、責任は重大です。このことは人ごとではありません。私たち日本人すべてが知恵をもちより、直ちに行動しなければならない国際公約です。では、どんな知恵と行動が求められるのでしょうか？ 現在この難問に応えようと、さまざまなアプローチがなされています。以下にその取り組みの一つとして、独立行政法人科学技術振興機構(JST)の社会技術研究開発センター(RISTEX)が運営するウェブサイト「地域に根差した脱温暖化・環境共生社会」をご紹介します。

JSTは、わが国における科学技術の研究開発戦略を企画し、大学や公的研究機関、企業に対して資金援助や情報サービスを行っています。RISTEXでは、政府が定める第3期

科学技術基本計画(平成18～22年度)を受けて、“市民の生活の質を高める”、“社会の安全を高める”など、社会的・公共的価値を生み出していくための研究開発を支援しています。その中の一つの研究領域である「地域に根差した脱温暖化・環境共生社会の研究」は、私たちの生活空間を脱温暖化・脱化石燃料・環境共生型へ転換するための調査研究や技術開発を行っています。本領域は平成20年度からスタートし、現在、全国各地域に合計25件のプロジェクトが設定されています。従来のテーマが自然科学・産業技術に特化しているのに対し、本事業では社会科学や人文科学を含めた総合科学を支援します。環境問題のように個人の価値観やライフスタイルと深く関わる課題の研究開発には総合科学の視点が欠かせません。とくに本事業では「地域

と「協働」をキーワードとしており、我われ環境NPOの活動方針と合い通じます。国際manifestoを遂行するための取り組みの一つとして今後の展開を大いに期待します。

▼研究開発プログラム「地域に根差した脱温暖化・環境共生社会」のウェブサイト：<http://www.ristex.jp/env/index.html>

つづがる・ひろげる みどりのわ

✦ 読者の方からのご意見をご紹介します。

● 2010年1月号(200回記念号)「1/環境市民」のコーナーにお便りをいただきました。

「環境問題の根源を平易かつ丁寧に凝縮して語っておられる様子が、その人柄とともに記事の随所から伝わってきて共感しました。2009年の掉尾を飾るにふさわしいニュースレターでした。担当編集者に敬意を表します」。

(環境市民会員 伊藤 準一さん)

👤 お便りありがとうございます。物事を伝えていくことは迷いも多く、人生自体にも悩みがっぱいの私です。ときどきどうしようもなく、立ちどまってしまふようなときには、榎田さんのお話が聞きたくくなります。私が環境の世界に足を踏み入れたのも、榎田さんの講演がきっかけでした。200号にあたり、私自身の原点に立ち返る意味でも、お話を聞かせていただきました。「たとえ挫折してもまた起きてはじめてもいい」というお言葉は胸にしみました。これからも、「自分が大切だと思うことをゆっくり」一步一步進んでいきたいと思ひます。

(ニュースレター編集部 千葉 有紀子)

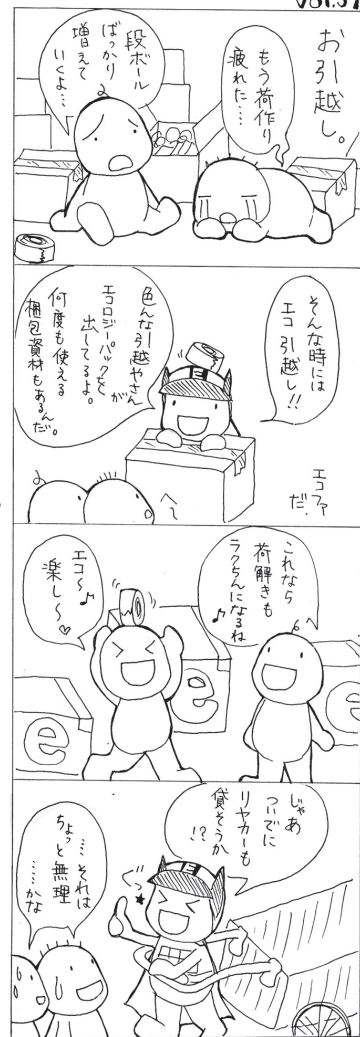
●ご意見・ご感想宛先●

メール・FAX・郵送でお送りください (MAIL)newsletter@kankyoshimin.org (FAX)075-211-3531

(郵送)〒604-0932 京都市中京区寺町通二条下ル 呉波ビル3階NPO法人環境市民 みどりのニュースレター編集部 宛

SKIPの! エコファイト劇場

vol.39



環境共育チームSKIPの環境プログラム「エコファイトショー」をモチーフとしています。

イラスト：かわみん



環境市民

かんきょうしみんぶんのいち

★環境市民の会員を紹介します



no.57 宮永 健太郎 さん

京都大学大学院等を経て、現在は研究機関に勤務。環境市民をはじめさまざまな団体で活動。京都新聞における環境市民の連載記事「ドイツの環境首都を歩く」(2007.3～2007.8)では一部執筆を担当。

多くの人、特に下流域にあたる京都・大阪の人に琵琶湖のことを知ってほしいです。

■環境活動との出会い

専門分野は環境ガバナンス論、NPOやパートナーシップ論など。NPOやパートナーシップといった切り口から今後のあるべき環境政策の姿について考えてみたい。この想いを出発点として研究を続けてきた宮永さん、最初の出会いは大学在学中にあった。京都大学で本会理事の植田教授のゼミに所属し、環境問題の研究を続けるうちに自然と環境市民のことを知った。熱意と能力をもった人々が集まって汗を流していたことが、宮永さんの目には魅力的に映った。

環境市民では主に環境首都コンテストに携わってきたほか、環境基本計画策定の住民参画コーディネーターに関わった経験も。住民や自治体職員と共に歩んだ1年半以上に及ぶ計画づくりであったが、それは研究論文という形でも発表された。ただし、と宮永さんは強調する。「計画策定には研究者宮永としてではなく、あくまでコーディネーター宮永として携わりました。そこにいる全ての人がよりよい地域の実現やそのための計画策定を目的している真剣勝負の場にあつて、一人だけ「自分の研究に役立てるため」という異なった立場から参加している人間がいたとすれば、みなさんに失礼ですから」。プロ意識と人柄が強く溢れることばであった。

■琵琶湖と水問題とパートナーシップ

仕事と生活の場が滋賀にあるということもあつて、現在は水問題にも関心を持っている。かつて植田教授は「環境問

題というのは、結局は水・空気・土の問題なんや」と宮永さんに語ったことがある。大気汚染や地球温暖化に代表される空気の問題、廃棄物問題などを通じて頻繁に扱われている土の問題と比較して、水の問題に専門的に取り組む社会科学分野の環境研究者は相対的に少ないのだと云う。

水問題は流域単位で考えなければならぬ。たとえば、目の前の川・湖だけを考えるのではなく森や山の管理にも気を配るなど、上流から下流までの流域を一体として捉えなければ水問題は解決できない。さらには流域に暮らす人々のライフスタイルや経済活動のあり方など、陸域のことも考える必要がある。行政だけでなく流域住民をはじめとするさまざまな人・組織が水政策に携わるのが重要であるし、そのための制度的枠組みの構築も求められる。まさにパートナーシップである。

特集で取り上げたヨシに関してはこう述べる。「ヨシとの共生を可能にしてくれるような社会のモデルを歴史の中から学ぶことは一つの興味深い課題です。またその社会モデルの現代的再生はどうすれば可能なのか、あるいはそのモデルはそもそも誰がどのように描くべきなのかといったことも重要なテーマです」。

■「人間」や「社会」という視点から環境問題を考える

好奇心は強い方で、これまで自転車の勉強会で講師を務めたり、琵琶湖河川レンジャー制度の運営に参加したりしてきた。しかし、たとえば自転車がすこ

く好きというわけではないらしい。「自転車、河川といった分野そのものよりは、分野に関わっている人達の方に関心を向けるタイプです。環境研究者としては少し変わっているかもしれませんが」と苦笑する。「どんなに素晴らしい政策手法や環境活動であっても、結局それらは人が担うもの」という想いが背景にある。ちなみに河川レンジャーは、琵琶湖流域でパートナーシップのコーディネーターを行う人達である。宮永さんは河川レンジャーそのものではなく、レンジャーの面接や制度全体の運営を行う運営委員会の一員として活動している。

琵琶湖を擁する滋賀県は自然の宝庫であり、自然を守るための取り組みは非常に多い。それは大事なことで前置きしたうえで宮永さんは述べる。「ここでは森や川の中に分け入って活動するなど、自然環境に直接働きかけるタイプの活動が主流になっているように思えます。しかし、人間社会の仕組みへの働きかけを通じて自然を守るといって、戦略に基づいた取り組みも盛んになっていくべきです。私は滋賀グリーン購入ネットワーク^{※1}という組織でグリーン購入を促める活動に参加していますが、それもこうした思いが一つの契機となっています」。

「人間や社会が変わらなければ自然も環境も変わらないうし、したがって持続可能な社会も実現できない、というのが私の根本にある発想です。そして、これは滋賀県民としての思いでもあります」と語る宮永さんであった。

※1 滋賀にグリーンな市場をつくることを目的とした、事業者・自治体、NPOからなるネットワーク団体。2006年設立。

(文) ニュースレター編集部 乾 孝史



今月のありがとう

目立たないところでも、お力を貸してくださった方々に、感謝をこめて。

<ニュースレター発送>

窪井 千鶴子 / 島村 吉男 / 中島 吾郎 / 野中 誠 / 藤井 千穂 (五十音順敬称略)

編集後記

関心→活動→そして繋がる。ニュースレターを通して、読者の皆さんが関心を持てる記事を少しでも多く提供できればと思っています。初の執筆でしたが、書く楽しみだけではなく、繋がるすばらしさも経験できました。来年のヨシ刈りが楽しみです。

(ニュースレター編集部 大槻 達郎)

編集部 (五十音順)

阿比留 優子 駒 ゆき香 安江 晃子
有川 真理子 島村 吉男
伊藤 省二 角出 貴彦 デザイン
飯田 康道 田 麦 誠 下司 智子
乾 孝史 千葉 有紀子
宇治野 未菜 内藤 一樹
大槻 達郎 林 映里
風岡 宗人 森山 明香
久保 友美

事務所を探しています!

環境市民・京都事務所では、今の事務所よりも広い事務所をさがしています。みなさんのご支援のおかげで、活動も活発になり、資料が増え、ボランティアや打ち合わせの方が集うには手狭になってきました。そこで、以下の条件にあてはまるような物件を探しておりますので、みなさんのお近くでありましたら京都事務局までお知らせください。

条件

- 地域：京都市中京区東部
- 広さ：30坪ぐらい（現在20坪）
- 家賃：できれば20万円以下 / 月ぐらい
※お値引きして下さる方がいれば助かります

● 備考……ボランティアスタッフが集まるので、京阪、地下鉄、阪急のいずれの駅からも徒歩約10分圏内、自転車駐輪場が近くにある場所を探しています。また、できる限り冷暖房の使用を控えたいので、日当たり良好、風通しのいい場所を希望しています。



ご連絡はこちらまで
お願いいたします

京都事務局 電話 075-211-3521 FAX 075-211-3531

📻 ラジオ番組「環境市民のエコまちライフ」 京都三条ラジオカフェ (79.7MHz)

身近な話題から旬の話題まで環境の視点から情報発信 ● 放送時間：毎週月曜午後1:00から1:30（再放送は火曜朝7:00から）
インターネットでの試聴・ダウンロードはこちら → URL: <http://kankyoshiminradio.seesaa.net/>

環境市民に 入会しよう!

環境市民は、多くのボランティアと会員の皆さんの参加によって支えられています。
「持続可能で豊かな社会づくり」のために、ぜひ会員になって環境市民の活動を応援してください!

会員特典

- 月刊会報誌「みどりのニュースレター」をお届けいたします。
- 行事などの参加費を割引させていただきます。
- 環境に関する様々な情報を得たり、また質問や相談ができます。

会費

種別	年会費	入会金
個人会員	4,000円	1,000円
ペア会員	6,000円	2,000円
シニア・学生会員	3,000円	—
ファミリー会員	8,000円	2,000円
助成会員	10,000円	—
特別助成会員	50,000円	—
終身会員	一括 80,000円	—
営利法人会員*	1口 50,000円	50,000円
非営利法人会員*	1口 10,000円	2,000円

※ 年会費は一口以上

会費の振込み方法

- 1) 郵便振替振込用紙に、住所・氏名・電話番号・会員の種類・送金内容事項をご記入の上、「年会費+入会金」をご入金ください。（※シニア・学生・助成・特別助成会員は入会金不要）
- 2) ご入金を確認後、最新のニュースレターと会員バッジ、入会記念としてポストカードをお届けします。

寄付をする

住所・氏名・電話番号・寄付金額をご明記の上、下記の振込先へお振り込みください。

会費・寄付のお振込み先

【郵便振替】 口座番号：01020-7-76578
加入者名：環境市民

(発行) 特定非営利活動法人 環境市民 (代表) 校本 育生 (発行人) 堀 孝弘

TEL : 075-211-3521 IP 電話 : 050-3581-7492 FAX : 075-211-3531

E-mail : life@kankyoshimin.org URL : <http://www.kankyoshimin.org>

〒604-0932 京都市中京区寺町通二条下ル呉波ビル3階 (月から金午前10:00から午後6:00)

● 環境市民 東海事務所

TEL&FAX : 052-521-0095 IP 電話 : 050-3604-6182

E-mail : tokai@kankyoshimin.org URL : <http://www.kankyoshimin.org/tokai/>

〒451-0062 名古屋市中区花の木1-12-12 AOIビル4階

● 環境市民 滋賀事務所

TEL : 077-522-5837 E-mail : cefshiga@kankyoshimin.org

〒520-0046 大津市長等2丁目9-12 笹 文彦気付



この印刷物は風力発電による自然エネルギーを使用して大豆油インキで印刷しました。印刷：(有) 札書房



環境市民

Citizens Environmental Foundation

